

平成27年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成27年4月～平成28年3月

1. 学校概要

学校名 豊橋市立幸小学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 中高一貫教育 高等学校
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

所在地 〒 441-8113
豊橋市西幸町笠松183番地

E-mail miyuki-e@toyohashi.ed.jp

Website <http://www.miyuki-e.toyohashi.ed.jp/>

児童生徒数 男子 486名 女子 484名 合計 970名
 児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか (福祉)

3. 活動内容

(1) 本校では、総合的な学習の時間を中心に、3年生が「伝統文化」、4年生が「環境（生物多様性を含む）」、5年生が「福祉」、6年生が「防災」の分野にて、活動を行っている。

ここでは、27年度の6年生の「防災」の活動について紹介する。

防災・減災に関心をもち、命を守るための方法を考え続ける子の育成
総合的な学習の時間「わたしたちと防災～信じてつなげよう、命と絆～」の実践を通して

1 はじめに

未曾有の大災害をもたらした東日本大震災から、まもなく5年が、そして、厳寒の関西地方を襲った阪神淡路大震災からは、21年もの歳月が経過しようとしている。どちらの震災も私たちに与える衝撃は大きなものであったことは、記憶に残る。日本中が、深い悲しみに包まれたが、人々は手を差し伸べ合い、少しずつではあるが、前を向いて確実に一步を歩み続けている。

自然災害は、いつ起きるかわからない。だからこそ、過去の震災から、現代の私たちは多くのことを学ぶ。科学技術や医療技術の刷新、国や地方の防災対策など、あらゆる分野で物事が減災や防災の視点から見直されてきている。どれだけ年月が過ぎても、検証を続け、語り継ぎ、関心をもち続けることこそが、次なる災害へのいちばんの防波堤となるのだろう。

さて、わたしたちが住む、ここ豊橋市を含む東海地方でも、南海トラフを中心とした巨大地震が起きるといわれている。しかし、今、私たちの目の前にいる子どもたちは、自然災害の恐ろしさを、どれだけ理解しているのだろうか。6年生の子どもたちでさえ、東日本大震災が起きたときは、わずか小学校1年生。「悲しい出来事」としての記憶はあるかもしれないが、自分たちに直結するかもしれない出来事であるという意識までは、育まれていない。一方、「ものすごく揺れた。食器棚が倒れてきて、怖かったらしい。」「電話が通じなくて、すごく心配だった。」と、自分の親戚が、阪神淡路大震災や東日本大震災を経験した子どももいる。

こうした子どもたちがともに暮らす中、幸校区の自治会が「防災モデル地区」に選定された。そこで、来年度には、中学校へ進学する子どもたちが、この機会に震災への理解や、防災・減災の知識を得ることは、未来の幸校区についての願いをもち、現在や将来の生き方について思いを巡らせることができるよい学びになるのではないかと考え、本研究に取り組むことにした。

2 研究のねらい

- A 過去の大震災や、これから起こるといわれている大地震について、関心をもたせる。
- B 防災・減災の取り組みは、自分たちに直接の影響があるという切実感をもたせる。
- C 考えを深めたり、表現したりすることで、学びへの充実感を味わわせる。

自然災害や防災・減災に関心をもち、さまざまな人と関わりながら学びを深めることで、これからの自分たちが生活するうえで必要な出来事であることを理解し、災害をただ恐れるのではなく、自らできることを考え、行動しようとする思いを育むことができるであろう。

学びが完結するのではなく、学習後にも、意識をもち続けられる子どもたちを育成したいと考える。

3 てだて

A-① 専門家の先生の話聞いて、関心をもったことについて調べ学習を行う。

- ・元北海道大学教授の平川先生の講話から、個々が疑問に思った出来事について、書籍や資料を用いて調べ学習に取り組みさせることで、「地震」「防災」に対する関心を高める。

② 「目黒巻」を作成し、災害発生直後からの自分の行動を考える。

- ・「目黒巻」を作成することで、災害が発生した状況をシミュレーションさせる。また、調べたことと照らし合わせて考えることで、災害の発生だけでなく防災や減災の必要性にも目を向けさせる。

B-① さまざまな立場の方との出会いと、タウンウォッチングへの参加。

- ・市役所の防災危機管理課の中村さんや、幸校区防災会会長の上島さん、校区自治会長の久賀さんと出会う場を設定し、それぞれの立場から防災への取り組みや思いについて話をさせていただく。また、タウンウォッチングを行い、防災・減災の視点から校区を見つめさせる。

② 命を守るための事例についての学び。

- ・東日本大震災での「釜石の奇跡」と言われる出来事や、北海道の有珠山の噴火についての防災対策について調べることで、死者数を減らすために必要なことを考えさせる。

C-① 校区にできること、自分たちにできることについて話し合う。

- ・南海トラフ地震のような大地震が起きても、死者数を減らすために校区のためにできることや、6年生としての立場でできることについて、考えを深める。

② 学びの中で生じた思いを表現する場の設定。

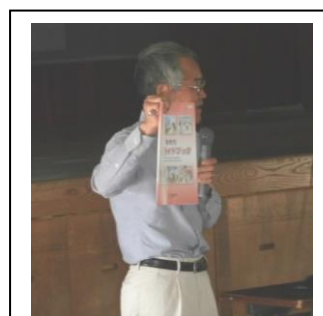
- ・地域の方やペア学年の3年生など、相手に応じた方法で自分たちの思いを伝える。

4 研究の実際

A 過去の震災や、これから起こるといわれている大地震に関心をもたせる

① 個々の関心に合わせた調べ学習

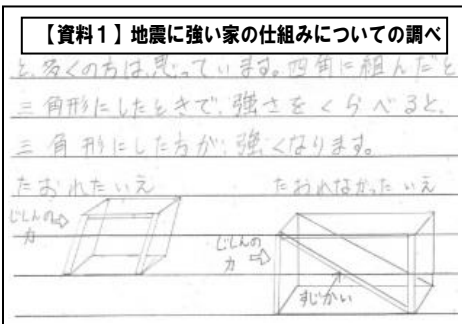
元北海道大学教授の平川先生を学校にお招きし、「南海トラフ地震」についての講話をいただいた。過去に東海地方で発生した地震についての資料や写真を見せていただき、わたしたちが住む日本や東海地方は、地震大国であることを学んだ。地震がおよそ100年周期で発生している資料を提示いただいた際には、東海地震、南海沖地震、東南海地震の3つの地域ではその周期にあてはまる地震が発生していないことが、明確に提示された。「みんなが生きている間に、とても大きな被害の出る地震が、ここ東海地方で起きる可能性は大変高い」という言葉は衝撃で、子どもたちの地震に対する興味のもち方が大きく変わっていききっかけとなった。(写真1)



【写真1】 講師の平川先生

講話の後、学んだことを整理すると、「昔の地震って、ぼくたちが生まれていないから、全然知らないんだよね。」「お母さんも小さい時から危ないって言われてたって。でも、まだ起きてないから、今度起きたらすごい被害になるのかもしれないから怖い。」などと感想を述べた。そこで、「災害が起きたときの様子をもっと調べよう」という大きな学習課題で、自分の学びたい、知りたいことについて、調べ学習を始めた。

子どもたちの興味は、「過去の大きな地震の被害について」「地震が起きたらどうなるのか」「地震はなぜ発生するのか」「南海トラフ地震が発生したら、どんな被害が出るのか」など、多岐にわたる。そこで、過去の地震や地震発生メカニズム、対策については図書館にある本を用い、南海

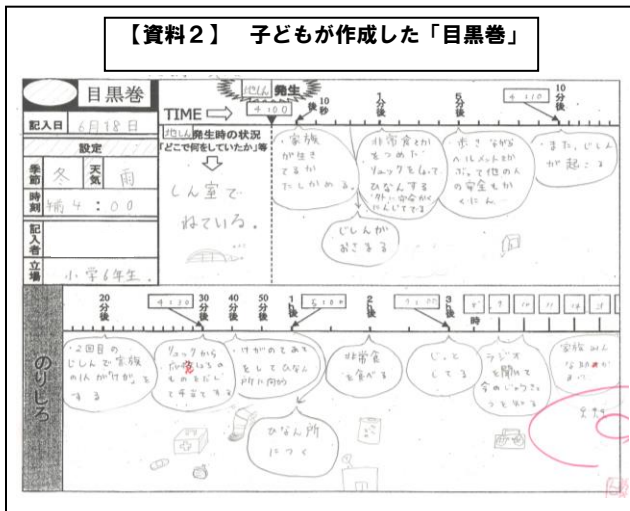


トラフ地震に関することは、市役所から各世帯に配布されている「防災ガイドマップ」を資料として用いて学習をすすめた。過去の震災の被害の大きさや、豊橋市や幸校区の予想震度や被害予想を調べる中で、地震発生にともなう被害の大きさや恐ろしさを実感する子が多くいた。一方で、地震に強い家の仕組みや、トリアージなどの防災医療の仕組みが整えられてきていることなど、防災の分野にまで目を向け始めた子もいた。(資料1)

一つの出来事を調べ終わると、そこから派生した次の疑問について調べる子もおり、平川先生の話をつきかっけにした調べ学習で、子どもたちの関心が地震に大きく向き始めたことを感じた。

② 災害発生時のシミュレーションを行うための「目黒巻」の作成

調べたことや、調べて感じた思いを共有したところで、市役所の防災危機管理課の中村さんから職員が教わった「目黒巻」の作成に、子どもたちも取り組んだ。大きな地震が起きると、「身を守る」「避難する」ということは知っていても、さまざまな要因が重なり行動は複雑になる。そうした複雑さは、資料を読み取るだけでは知ることができない。「目黒巻」に記入することは、刻々と過ぎていく時間の中で、どんな行動が必要となるのかを、子どもたちが自分の立場で考えることに効果的であると考えた。また、授業参観での活動を設定することで、保護者の方にも防災に関心をもっていただく機会にすることもできる。



「目黒巻」を作成すると、自分の部屋や家の中で避難するとどまる子や、避難所へ行くことまで想定する子など、個々によって記入量に大きな差が見られた。実際に地震を経験したことの無い子どもたちなので、当然の結果である。それでも、どの子どもも、友達や保護者の方と相談しながら一生懸命に考えられることを記入していった。(資料2)

作成を終えると、取り組みが楽しかったという反面、「地震が起きたらどのように行動すればいいかわからない。」「命を守ることができるか不安。」という声も上がった。そこで、「どうしたら、自分の命が守れるのか」と学習課題を新たに設定し、具体的

的な防災の取り組みについての調べ学習に取り組むことにした。調べたことは、個人やグループで画用紙にまとめ、教室内に掲示して共通理解を図った。

平川先生の話聞いて生じた疑問についてじっくりと調べることで、子どもたちは地震に対する関心を自然に高めていくことができた。また、「目黒巻」を作成し、自分の行動について考え直すことで、「命を守るために」という防災の取り組みについても視野を広げ、学習意欲の持続を図ることができた。

B 防災・減災の取り組みは、自分たちに直接の影響があるという切実感をもたせる

① 人々との出会い

さまざまな防災対策を調べることで自助の知識を増やすことができ、安堵する子どもたちが多くいた。しかし、豊橋市や幸校区の具体的な予想死者数を知ることで、再度危機感を抱く子どももいた。そこで、「自分の命を守る」という思いを発展させ、「みんなを助ける」という意識をもたせたり、災害についてのさまざまな対策は、自分や家族の命に直結するという認識をもたせたりするために、市役所の方や、校区の方に出会わせる機会を設定した。(写真2)

はじめに、防災危機管理課の中村さんを学校にお招きし、豊橋市の防災について話をいただいた。南海トラフ地震を想定し、豊橋市としてさまざまな設備を用意していることや、防災のイベントを開催して住民に関心をもってもらう取り組みをしていることなどを話していただき、子どもたちは興味深く聞くことができた。また、「自助・共助・公助」の言葉の説明から自助の大切さについて話がおよぶと、子どもたちは自分たちの調べてきたさまざまな防災対策の重要性を、改めて認識することができた。

中村さんの話を受けて、次には、校区の防災に取り組まれている上島さんと久賀さんにお越しいただき、幸校区の防災活動の取り組みについて学ぶ機会を設定した。幸校区では、各町内に防災の組織が組まれていることや、災害が発生したときには町内で決められた一時避難場所へ行き、家の被害状況を報告すること、校区内にある指定避難所や高師台中学校に設置される救護所のことについてなど、話してくださった。町内にあるさまざまな公園や建物の名前が出てくることが多く、実際に自分たちがどのように行動したらいいのかという参考になる話もあり、多くの子が話に聞き入った。

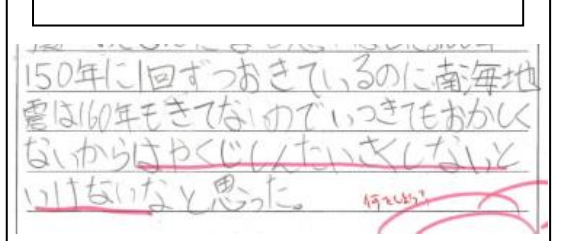
3名の方と出会ったことで、子どもたちは「早く地震対策をしないとイケない。」「少しでも備えて、少しでも助かる確率をあげたい。」と、早急行動に移すことが大切だと気づいた。また、「防災についての活動で、参加できることがあったらぜひぜひ参加して、がんばって活動したい。」「地域みんなに、今日学んだことを言う機会があったらみんなに教えたい。」などと、地域に対して自分にできることを行動したいと考え始める子どももいた。

このように、本や資料からの情報だけでなく、公助の立場で防災に真剣に携わる方々と出会い、



【写真2】 中村さん(左)と上島さん(右)

【資料3】 中村さんと上島さんの話を聞いて



話をさせていただくことで、防災の取り組みと自分たちの命を結びつけて考えることができるようになった。

② タウンウォッチング

防災対策に真剣に携わる方々と交流し、防災への関心を深めてきた子どもたちに、「防災」の視点から自分たちの校区を見直させたり、地域の方とともに活動する共通の体験をさせたりしたいと考え、タウンウォッチングを行った。

以前お世話になった上島さんや久賀さんをはじめ、多くの方々にご協力いただいた。6年生も地域の方も4つのグループにわかれ、通学路を基準とした決められたコースを3時間にわたって歩き、点検をした。初めは緊張していた子どもたちだが、危険箇所を見つけて意見を伝える場では、地域の方に積極的に話しかける姿も見られた。(写真3)

活動後のふり返りでは、「自分が思っていたより危ないところが多くてびっくりした。」「何も考えずに通っていた通学路にも、たくさんの危険があった。」など、普段通る通学路にも防災の視点から見るとさまざまな危険があることを実感した子が多くいた。また、自分の家のすぐ近くに防災倉庫があることを教えてもらった子もいて、「防災倉庫があることを教えていただいたので、地震が起きたらこれを役立てたいです。」と、ふり返っていた。他にも、「家族に話して、避難するルートを考えてみたい。」「通学団のみんなに、タウンウォッチングで学んだことを教えていきたい。」「タウンウォッチングをやったので、少しは生き延びれる自信にもなりました。」という言葉からは、自分が行動しようとする思いが多くの子に芽生えてきたことがうかがえた。



【写真3】タウンウォッチングで防災倉庫を見せてもらう子どもたち

地域の方と関わる機会が多くはない子どもたちなので、地域の方とともに活動できたことは、とても意味のある経験になった。地域の方々のおかげで、校外での学習を充実させることができた。

③ 「釜石の奇跡」「有珠山の噴火の対策」についての調べ

災害の中には、事前の対策をきちんとしていたり、災害時に一人一人が命を守るために真剣に行動したりしたことで、被災者を減らすことができた事例がある。自分たちで行動したいと考え始めた子どもたちにそうした事例を知らせることで、対策の方法の幅が広がったり、助けられる子どもという立場ではなく、自分で命を守ることができる一人として、使命感をもたせたりすることができる考えた。

釜石の奇跡や有珠山の噴火対策については、インターネット資料を参考に学びをすすめた。読み取りが難しいものもあったが、専門家との連携、大人の適切な判断、過去の出来事を教訓とすること、避難訓練を真剣に取り組むこと、地域の方とのつながりを大切にすることなどを、死者数の少なくできた要因として考えた。また、率先避難者になることを教えられた釜石市の子どもたちの行動から、「子どもたちの対応力がすごくよかったから」「小中学生が、防災について勉強していたから」などと、子どもたちの姿勢が多くの人を救った理由と考える子もいた。来年度、中学生になる子どもたちにとって、同い年ほどの子どもたちの行動は、学ぶところが多い。一方で、自分たちの避難訓練のふり返りと照らして「もし私たちの学校で地震が起きたら、その小中学生のようにかけ抜け、叫ぶことができるのか、少し心配になってきた。」と、自分の行動力に不安を感じている子もいた。(資料4)

釜石市の子どもたちと同じように行動するには、たしかにすぐには難しいかもしれない。しかし、二つの事例を知ることで、自分たちが避難を促す立場にならなくてはいけないのではないかということに気づくことができた。

【資料4】 二つの事例についての学習を終えたふり返りの記述

これより先の子たちがすごいと思いは、それに校内放送
を聞かず自主的にかみ取りをしながらにしていたこと
も、私の学校で起きたらその小中学生のように
かみ取りをやるのか少し心配はなっていました。

C 考えを深めたり、表現したりすることで、学びへの充実感を味わわせる

① 校区にできること、自分たちにできることについての話し合い

学びを通し、子どもたちから「だれも死んでほしくない。」「豊橋の奇跡」「幸の奇跡をおこした

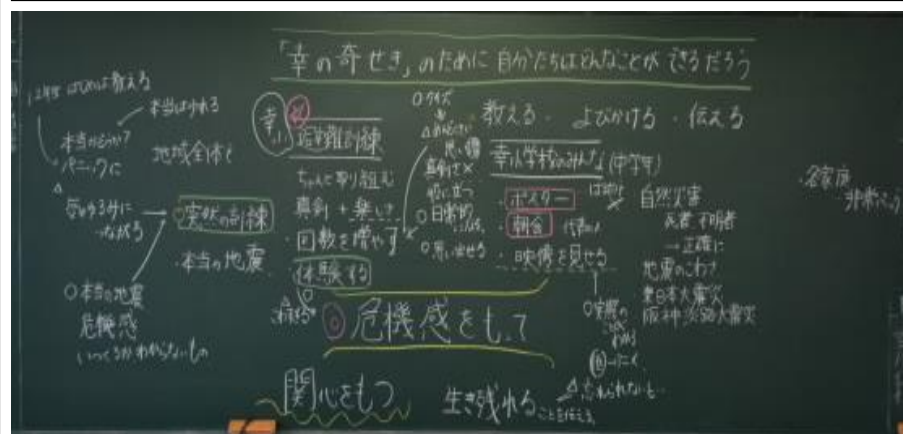
い。」という言葉が出るようになった。そこで、これまでの学習をもとにして、「幸の奇跡のために、どんなことができるのだろう」の学習課題で、話し合いをした。

話し合いの前半では、自分が考えたことを発言させた。地域への呼びかけが必要と考える子もいたが、多くの子が小学校の子どもたちへ呼びかけたり、教えたりすることが必要であると考えていた。とくに、釜石の奇跡の教訓から、避難訓練について意見をもつ子が多かった。こう考えるのは、自分たちが6年生として防災のことを初めて学習したことの充実感や、その学びの中から生まれた使命感、そして、自分たちが知っているだけではいけないのではないかという戸惑いがあるように感じられた。

後半は、子どもの発言である「危機感」をキーワードとして取り上げ、各提案について、より危機感をもつための意見を交流した。「中学年以上に知ってもらえばいいのか、低学年も知るべきなのか。」「低学年には難しい内容が多いので、どのように伝えたと効果的であるのか。」「避難訓練をどのように変えたら、みんなが真剣に取り組んでくれるのか。」「本当の地震を体験したことがない幸小学校のみんなに、どうやって地震の恐ろしさを伝えたらいいのか。」など、さまざまなことについて、学習をもとにして考えた意見を交流した。

子どもたちの発言からは、地震や防災についての知識を得たからこそ、自分たちが何かをしなくてはいけないと考えていることが感じられた。また、「自分の命が助かればいい」というだけではなく、「できるだけ多くの命を守るために」ということを意識して、話し合いをすることができた。(資料5)

【資料5 「幸の奇跡のために、自分たちはどんなことができるだろう」話し合い後の板書】



② 学びの中で生じた思いを表現する場の設定

当初より、数名ではあるが自分たちが感じた地震の怖さや、備えることの大切さについて考えたことなどを伝えたいという思いを抱く子がいた。学習が深まるにつれて、そうした思いは学級に広がっていった。前時までも、地域の方や幸小学校の子どもたちへと、伝える相手を意識した提案や話し合いが行われていた。だれかに伝えたいという子どもたちの思いを生かして達成感を味わわせることや、自分たちの考えを伝える経験をすることが、自分だけでない、人とのつながりを意識した今後の生き方につながると考え、地域の方や、ペア学年である3年生に学びを発表する機会を設定した。

地域の方への発表については、学年を4つのグループに分け、それぞれがテーマをもってクイズや劇など、さまざまな方法で「防災」についての出来事を紹介した。地域の方々は、真剣なまなざしで、時にはうなずきながら各グループの発表を聞いてくださった。地域の方々はその温かい姿に応えるようにと、子どもたちは一生懸命に発表することができた。中でも、タウンウォッチングで見つけてきたことを、子どもたちが一



【写真4 地域の方への発表会の様子と、作成したジャンボ防災マップ】

枚の地図にまとめた「ジャンボ防災マップ」や、それにもない作成されたキャラクター「防災仮面」が披露されると、参観していただいた方々から歓声が上がった。発表会の終わりには、久賀自治会長様より子どもたちの発表について、お褒めの言葉をたくさんいただいた。また、作成した防災マップは校内の掲示板にその後掲示していただき、幸小学校の子どもたちにも見てもらう場を作ることができた。

3年生への発表はクラスごとに地域の方への発表を参考にしながら発表の方法を工夫し、紹介した。伝える相手を意識し、中学年にもわかりやすい伝え方をどのクラスも考えることができた。また、3年生の子どもたちが、6年生の発表を真剣に聞いてくれたことは、6年生の子どもたちの励みにもなった。

「だれかに伝えたい」という思いが子どもたちから上がったことは、自分たちが伝えなくてはいけないという切実感を抱くことができたからこそその言葉である。どちらの発表会も、子どもたちにとって、達成感や充実感を十分に味わうことのできる発表会となった。(写真4)

5 研究の成果

A 過去の震災や、これから起こるといわれている大地震に関心をもたせる

専門家の方の話から生じた疑問をもとに調べ学習をしたことは、地震や防災についての共通の土台を子どもたちの中にもたせることができた。そのため、一つの疑問を解決して終わることのない、積極的な学習につながったといえる。また、「目黒巻」を作成したことも、災害の複雑さに気づくことができ、「自分たちにできることはないか」と、さらなる追求につながった。

子どもたちの疑問に沿った調べ学習を行うことや、「目黒巻」で災害時のシミュレーションを行ったことは、「地震」や「防災」についての関心を高めることに効果的であった。

B 防災・減災の取り組みは、自分たちに直接の影響があるという切実感をもたせる

防災にかかわる方々に直接話を聞いたことで、早急に防災対策を取らなくてはいけないと思ったり、助かる確率をあげたいと考えたりする子どもの姿は、防災対策と自分たちの命を守ることが結びついていることに気づいたからこそ出てきた思いである。また、タウンウォッチングを通してわかった校区内の危険箇所についても、「知らせたい、伝えたい」という思いをもつことから、多くの人の命を守りたいと考える子どもたちの防災意識の深まりを読み取ることができる。さらに、死者数の少ない二つの事例からは、自分がどういう立場で行動できるようにならないといけないのかについても、思いを巡らせることができた。

真剣に防災に携わる方々との出会いや、タウンウォッチングへの参加、過去の減災の取り組みについて学んだことは、防災と命のかかわりを理解し、命を守らなくてはいけないという切実感をもたせることに効果的であった。

C 考えを深めたり、表現したりすることで、学びへの充実感を味わわせる

避難訓練の工夫やたくさんの人への啓発活動など、「幸の奇跡」のために自分たちができることを真剣に考えなくてはいけないという意識で、多くの子が意見を交流することができた。また、地域の方やペア学年への発表会は、「緊張したけど、みんなが真剣に聞いてくれてうれしかった。」と、学んできたことや考えてきたことを認めてもらえる、よい機会となった。

目的意識をもって話し合い活動をすることや、学びの成果を発表する場を設定したことは、子どもたちが学びへの充実感を味わうことができるとともに、積極的に行動しようとする自覚を芽生えさせることにもつながった。

6 今後の課題

過去の大地震をあまり知らない子どもたちに、このような学習をする機会をもたせることは、将来の校区や社会の担う子どもたちにとって、とても貴重な経験である。今後の生活の中で、自分の行動を支える動機にもなると考える。一方で、起震車や避難生活などの体験活動を充実させたり、ゲストティーチャーと関わる機会をより効果的に設定したりすることができたら、子どもたちの学びはさらに深まったと考えられる。子どもの学びが深まる効果的な学習活動を考えていきたい。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）